

琉球語とエスニシティ

— 沖永良部方言の衰退と復興を中心に —

Ryukyuan Language and Ethnicity:
Focusing on the Decline and the Revival of Okinoerabu Dialect

高橋孝代
TAKAHASHI, Takayo

キーワード：琉球語、標準語、方言

I はじめに

2015年、奄美各地で方言復興に関する動きが目立った。地元のローカル紙「南海日日新聞」にはしばしば方言復興への取り組みが紹介されていた。例えば沖永良部島では方言による昔話のCDの制作が行われ、徳之島では島口ミュージカル「結-MUSUBI」が開催され、また奄美大島の大和村教育委員会および同村PTA連絡協議会は島口カレンダーを作成して島の言葉を残そうという動きがあった。北部奄美大島では伝統的祭祀が継承者不足で廃止となり、古くからの文化要素がなくなりつつある一方で、方言保存に関する催しが目立っていた。方言・島口はなぜこのタイミングで人々の注目をあびたのだろうか。

これまで琉球語に関する研究は、国語学、方言学など「言葉」の研究として多くの研究成果がある。しかし、これらの言葉を話している人々に焦点を当て、言葉と人間、社会の関係性に焦点をあてた研究は多くない。本稿は、言葉を通して沖永良部島と、それを取り巻く社会環境との関係に焦点を当て、衰退と復興の動きを考察する。本稿は、2000年以降継続的に行ってきたフィールドワークおよび文献資料による。

II 琉球語か方言か

琉球弧で話されている言葉を、一つの独立した言語とみなすか、日本語の中の一方言とみなすか、その位置付けに関しては研究者によって意見が異なり、定まった見解はない。現在のところ、国内における日本語学や日本方言学の分野では、「琉球方言」として日本語の中の2大方言の中の1つとする考え方が大方の支持を得ている。琉球方言と本土方言に2大別される日本語方言の中で、

沖永良部島で話されている言葉は、琉球方言の一つに位置付けられている。

しかし、国外の研究者は「方言」ではなく「言語」と見なす場合も少なくない。イギリスの言語学者チェンバレンは『琉球語文典と語彙』の中で奄美沖縄で話されている言葉を「琉球語」と呼び、日本語と共通の祖語を持つ姉妹語と位置付けた。またアメリカの文化人類学者レブラは、*Okinawan Religion*で琉球語と日本語の類似関係はイタリア語とフランス語の類似関係と似ている (Lebra 1966: 8) と述べている。

言語学的に言語と方言をどう定義するかも、研究者によって様々である。しかし、その中で多くの研究者の支持を得ている定義がある。それは、Chambers, J. K. and P. Trudgill の著書 *Dialectology* (1980. Cambridge University Press) における定義である。端的に言えば、ある二つの言語が互いにおおよそ理解可能であれば、この二つは同一言語のバリエーション、つまり「方言」と見なされ、そうでなければ「言語」と見なされる、というものである。

この定義に関しては、木部暢子の説明¹がわかりやすいので、これを参考に説明すると以下である。例えば、東京で話されている言葉と大阪の言葉は違いがあるが、理解不可能なほどではない。したがって、両者の言葉は方言の関係にある。では青森の言葉と東京の言葉はどうであろうか。両者は理解不可能なほど違っているが青森と東京の間には秋田の言葉、山形の言葉、福島、栃木の言葉、埼玉の言葉が広がっており、隣り合うそれぞれの言葉は、理解可能である。言葉はグラデーション的に少しずつ変化しながら広がりを持っており、青森の言葉と東京の言葉は、秋田、山形、福島、栃木、埼玉の言葉を介することによって方言の関係になるわけである (木部 2011: 5)。

では奄美沖縄で話されている言葉はどうだろうか。東

こども教育宝仙大学 非常勤講師

京の人にとって奄美沖繩の言葉は理解不可能なほど違っている。両者をつなぐ福岡、鹿児島という言葉も奄美沖繩の言葉と理解不可能なほど違っている。そうすると、奄美沖繩の言葉は、東京、福岡、鹿児島という言葉とは方言の関係ではなく言語の関係ということになる。奄美沖繩の言葉は各島々で違いが大きく、沖永良部島の言葉と与那国島の言葉は互に通じない。そうすると、方言ではなく言語ということになるので、定義上は沖永良部語、与那国語となる。

言語的相違の大きい琉球の言葉と日本語がなぜ「方言」とされてきたのか、奄美沖繩の歴史的ないきさつと現在の社会的状況によるのだが、言語学者上村幸雄(2002b)は、奄美沖繩の言葉を言語とするか方言とするか、その呼称に関して、以下のように述べている。

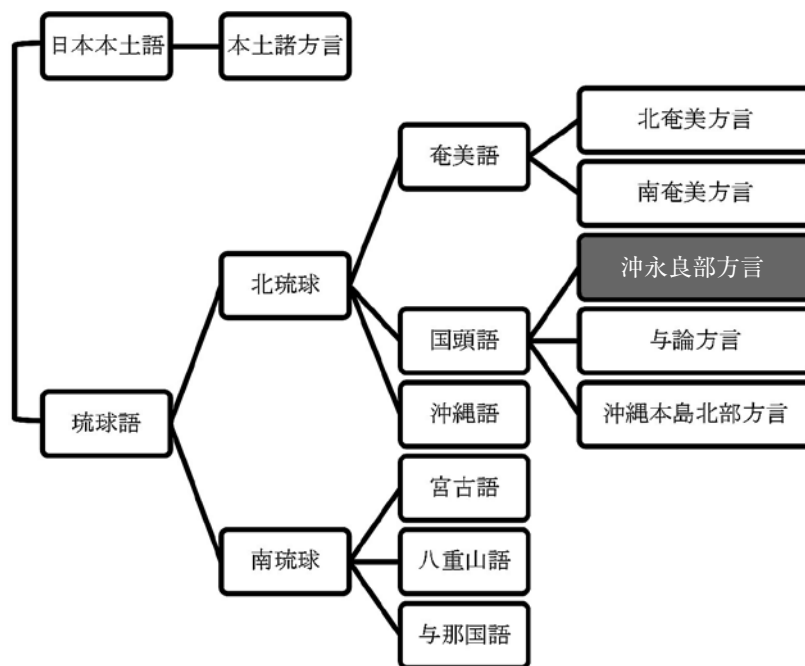
日本語と琉球語のあいだにみる相互理解度を欠くほどのおおきな相違にもかかわらず、少なくとも1972年の復帰の年までは、「琉球語」という名称は琉球列島を日本本土から遠ざける名称として、地元においてこのまれる名称ではなかった。したがって筆者もそれを尊重してかつてはこれを「琉球方言」と呼んでいた。祖国復帰が実現し、アメリカ軍政が終わり、高いレベルの地方自治と経済的な安定とがもたらされた現在では、特定の政治的勢力に利用されることなく、また差別的な語感を伴うこともなく、はじめて日本のなかで琉球列島の固有のながい歴史と文化、言語の独自性を安心して主張できる条件が生まれたので、琉球列島の住民をふくめ日本国民全体にこの

点の注意を喚起したいため、筆者の信じる言語学的常識にしたがって、日本の大方の国語学者、方言学者の習慣に反して筆者は今は「琉球語」と呼ぶことに変えているのである(上村2002b:355)。

奄美沖繩は、本土の7世紀以降の古代国家、そしてそのあとに続いた13世紀以降の封建制度の国家の直接の支配を19世紀の第三、四半世紀にいたるまで、受けたことがなかった。しかし、1609年に薩摩藩が琉球王国に侵攻した後、政治的支配下におかれ経済的搾取はされたが、琉球語をはじめ文化的には強い影響を受けることはなかった。だが、明治維新後、琉球王国は沖縄県として日本国家に編入され、琉球語は独立国の言語ではなくなった。

全国的な標準語の普及で公的な場での琉球語の使用ははばかられ、それ以後琉球語は衰退の一途をたどる。日本国の一部として、地元住民からも日本の国語学者からも「方言」と呼ばれるようになったのである。琉球語はアイヌ語と異なり日本語と比較的近い言語関係にある。平安時代の古語が現代の奄美沖繩で話されている言葉と共通する単語もあり、日本文化の古層として位置付けられてきたのであった。

筆者は、沖永良部島の言葉を第一言語とする一人として、本土の言葉との差異は方言の範疇におさまる程度ではないと考えてきた。前述の言語と方言の定義も納得がいく説明であると考え、また上村幸雄の琉球の言葉へのスタンスも共感できる。したがって、本稿では奄美沖繩で話されてきた言葉を琉球語と総称し、その中の沖永良部島の言葉を沖永良部方言と呼称する。琉球語におけ



(木部暢子2014「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 報告書 鹿児島県沖永良部方言」を参考に作成)

る沖永良部方言を図示すると以下である。

Ⅲ 言語と社会の歴史

1. 近代と方言札

奄美沖繩の言葉が危機的な状況にある現状は、琉球王国が近代国家日本に編入された時点から始まったと概ね考えてよからう。歴史を振り返れば、1609年の薩摩藩による琉球侵攻後、藩の直轄領として統治されていた沖永良部島は、言語や風習など文化的な本土化は禁じられていたが、近代国家に組み込まれると、今度は反対に国語教育や非日本的因習の廃止と日本文化の注入、国家と天皇への忠誠心の育成という同化政策が実施されていった。

全国的に標準語の使用が励行され、同時に地方の言葉が劣位化されていった。教育の現場では、全国に通用する標準語を指導していた。1875（明治8）年、沖永良部島では和泊集落に初めて仮学校が設置され、その後1878（明治10）年までには全島に合計17校の小学校が新設された（西久保紀林1879）。和泊小学校の『創立百周年記念誌』（1977）によると同小学校では明治40年に「方言普通語対照表」を掲示している（和泊小学校記念誌編集委員会編1977：19）。また『創立百周年記念誌』（1977）には、卒業生の小学校の思い出が綴られているが、その中で大正3年に和泊小学校に入学した卒業生の文章から、そのころの教師も標準語を使いこなせなかったため、方言と標準語を織り交ぜての授業であったことがわかる（和泊小学校記念誌編集委員会編1977：62）。

また同誌には、標準語を習得するために、方言を話さないようにしようと島民の側から発案し、使用した者には罰則が課せられたことが記されており、例えば、掃除当番、習字用の水汲み、水配り、用済み墨水の処理、便所掃除があったという。さらに最高の罰則として当時の生徒たちが最も嫌がった罰が、「男女同じ机腰掛けに座らせる」ことであったという。

罰則には様々なものがあったが、悪則としてよく知られているのに「方言札」がある。方言札は、旧琉球王国の範囲である奄美諸島から八重山諸島まで申し合わせでもしたかのように広がった。方言札は20世紀初頭に出現し、戦後の1960年代半ばまで存在した。標準語の励行は奄美沖繩に限らず、全国規模で行われていたが、特徴的なのは「方言札」と呼ばれる罰則の札が使用されたことである。

沖永良部島でも方言札は使用されており、『和泊町誌—歴史編—』には、明治43年に大城小学校に入学した花田吉輔（男性・明治36年生）の体験が紹介されている。それは、当時、長さ35センチほどの長方形の「方言を使いました」と書かれた木札があり、方言を使用したもの

は首からぶら下げていなくてはならなかった、というものである。その後、「方言札」と呼ばれるようになったこの木札は、誰か他に方言使用者を見つけるまでぶら下げてはならず、見つからない場合は3日でも4日でもぶら下げていなくてはならなかったという。

方言に関して、方言札の良し悪しを含め、沖繩本島では多くの議論が行われてきた。標準語普及のために方言札を使用せよという言説はほとんど公式には表現されてこなかった。それどころか、方言札が沖繩社会に出現した初期の段階からあまり適切な方法とは言えないということを経験した教育者自身が自覚していたようである。1916（大正5）年の「沖繩県教育会総会における諮問による答申」中の「普通語ノ励行方法答申書」には、

「1、方言ヲ使用スル生徒ニ罰札ヲ渡シテ制裁ヲ与フルモ地方ノ状況ニヨリ校風ノ如何ヨリ一時的方便トシテハ可ナラシモ主義トシテハ善キ方法ニアラザルベシ」

とある。

本土側、特に沖繩に調査に訪れる研究者を中心に、標準語励行運動に疑問を投げかける意見が相次いだ。それは柳宗悦ら民芸同人らで、廃れゆく琉球の言葉に危機感を感じ、「沖繩口（ウチナーグチ）は誇るべき日本の宝」と真っ向から異を唱え、中央論壇をも巻き込む大論争となった。発端は、1939年4月、民芸同人らが沖繩の民芸調査の後に、沖繩第二高等女学校で行った、地元知識人との座談会であった。柳は日本語のルーツともいえる沖繩口を禁じて標準語に改めようとしていることを「不可解である」と発言した。標準語励行運動を支持する出席者からは反対意見が続出した。翌1940年、民芸同人の第三回目の沖繩調査のさ中、論争は再燃した。那覇市公会堂で観光座談会で、方言廃止不賛成の口火を切った式場の発言に沖繩県警察部長が激しく反論し対立は深まった。本土との一体化を急ぐ沖繩県にとって、柳らの「標準語普及は良いが、方言は決しておろそかにするべきではない」という今にすれば当然の主張も当時は沖繩の人々には相いれない考え方であった。論争は東京にも飛び火し、民芸に限らず柳田国男など多くの文化人がそれぞれの立場で積極的に発言した。この一連の議論がのちに言う「方言論争」である。

2. 本土への移動と標準語

沖永良部島民が標準語の必要性を真剣に考えるようになったきっかけは、本土への移動ができるようになったことである。薩摩藩直轄領であった近世には本土や沖繩本島への移住は禁止されており、方言しか話せなくとも不自由することはなかった。しかし、近代になり本土への移動が次第に多くなり、実際に言葉が通じないことに

よる様々なトラブルやストレスの経験により標準語習得への真剣みが増していったのであった。

本土への出稼ぎは1907(明治20)年代から始まった。島には県立高校が一つあるだけで、それ以上の高等教育機関はなく、また、多くの労働者を吸収できる産業もない。そのため、沖永良部島の人々の多くが一度は進学や就職で島外へ出る経験を持つことになる。「島を一度は出る」ことが一人前の大人になる「通過儀礼」のように島を出て、本土へ行くことを前提に子育てをするようになっていった。明治期の移住者にとって、未知の場所での生活は不安が多く、すでに生活基盤を築いた兄弟や親戚を頼るため特定の場所に集中し、そこに自ずと出身者のコミュニティが形成されていった。明治以降の沖永良部島と本土の関係は就労や就学の間、そしてその延長線上に定住の可能性のある地として展開していった。当時の出稼ぎ者は慣れない本土での生活に加え、ヤマトンチュとの日常的な関わりあいから言葉が原因となる否定的な側面とも直面し、このような体験が方言から標準語使用へ島民の心の変化を促進していった。例えば大山勝男(神戸市在住沖永良部島二世)の『あるシマンチュウの肖像』(1999)には昭和戦前期に神戸に住む沖永良部島出身者の体験が以下のように記されている。沖永良部出身者は、「島口(奄美の方言のこと)が強く、生活の場や職場でも言葉の意味がうまく通じない。せっかく採用された職場にとけこめず、辞めていく者も多かったという」(大山1999:38)。そのような状況もあり、慰めに仲間と集うことも多く、コミュニティが形成されていった。大山は「シマンチュウは焼酎を飲めば三線を弾いて島口で唄い、踊る」ことから、「いつの間にか『奄美人はガラが悪い』とヤマトンチュウに陰口をたたかれるようになった」(大山1999:38)とも記す。

また、『神戸沖州会創立六十五周年記念誌(寄稿編)]の「今昔放談」の項には、昭和初期における沖永良部出身者の社会的位置づけのテーマでインタビュー記録が掲載されている。そこには、「第三国人的な見方をされた経験はありませんか」という質問に対し、ある沖永良部出身者が「私は三歳の頃から神戸に住んでいるのですが、小学校三年生の時、祖母が田舎からやってきて母親と方言で話しているのを遊びに来ていた友達が聞いて『君の国は鹿児島やと云うとったけど本当は××やろ。』『なんでそんなこと云うんや。』『お前のお母さんとおばあさん××語で話しよったやないか。』『馬鹿なこと云うな、俺は立派な日本人や、もうお前なんかと絶対に遊ばんからな。』子供ながらにショックやったんやね、それまでの私は、俺は鹿児島県人なんや、日本の偉人西郷さんとおなじ田舎に生まれたんや、と優越感に胸を張っていたんやね。それが彼の一言で自尊心が逆転し、屈辱感で全身が

ふるえたのを覚えています。……」(神戸中州会1989a:105-106)と答えているが、当時の人々の民族意識をよく表した体験談であり、また島の言葉が神戸の人にとっては外国語に聞こえるほど違いがあるということも示している。

当時の社会背景をみると、鎖国時代を終え近代国家への道を歩み始めた日本において、本土の人も急激に文化的他者と出会う機会が増えたであろう。世界的にも植民地主義・帝国主義の思想から種々の異なる集団の対立が増加し集団間の違いも顕在化した時代である。日本は明治時代後半になると日清、日露二つの戦争に勝利し、朝鮮を植民地化し世界の帝国主義国家の一つに数えられるようになっていた。言葉は、同一民族である、わかりやすい証でもあったのである。

当時、奄美諸島出身者も沖縄県出身者も、本土側からは「南国生まれのエキゾチックな人々」として他者としてのまなざしを向けられており、それは「人類館事件」に象徴される。1903(明治36)年3月から7月まで大阪の天王寺今宮で政府主催の博覧会が開催された際、博覧会とは直接関係のない営利目的の見世物小屋が会場周辺に立ち並んだ。その中に「学術人類館」と称する小屋があり、朝鮮人、北海道アイヌ、台湾高山族、インドキリン族、ジャワ人などいっしょに沖縄から連れてこられた遊女二人が「琉球の貴婦人」と銘打って見世物にされた事件である。沖縄側はそのことに対して激しく抗議し、まもなく二人は沖縄に返されたが、このことは沖縄の人々に氷解しがたい感情的なしこりを残したのであった。

近代になり日本国民となったばかりの奄美の人々が「日本人であって日本人でない存在」であったことは、アイヌの人々や琉球王国から沖縄県へと併合された沖縄県民と同様であった。実際にあった話として、大正の初めに奄美大島のある小学校で生徒たちに「将来何になりたいか」という質問に「日本人になりたい」と答えた子供が何人もいたという。子供たちだけでなく大人たちも日本人になることに必死であった。そのためには標準語を使いこなすことが重要であると考えられ、標準語が励行されたのである。

3. 戦後と方言

第二次世界大戦が終結し、甚大な被害を被った沖縄はそのまま米軍施政権下におかれた。沖永良部島やその他の奄美諸島も同様であった。

敵国と教え込まれたアメリカ合衆国の施政権下におかれ、日本復帰運動が盛んになったことは自然の動きであった。復帰運動の流れの中、本土復帰のために沖永良部島では文化的にも本土との同一性を強調すると同時に、沖縄を差異化する動きがあった。「二島分離報道」以後、

復帰運動の種々の会合の中で、言葉も標準語を話そう、沖縄の踊りや物を頭にのせて運ぶ風習、着物を着る際、帯を沖縄風に前に結ぶ風習もやめようという意見が出された。日本復帰のために、日本人意識が高まり、伝統的な島の文化が否定され本土の文化が肯定され、方言が否定的に捉えられていった。

その後、奄美諸島が日本に復帰を果たしたのは、1953（昭和28）年12月であった。外国となった沖縄と断絶ができた一方で本土との繋がりは再開した。復帰を契機に島の人々の生活には「本土並み」を目標に本土への応化に対するさまざまな変化があった。1953年8月8日のダレス声明後、同年10月23日に日本政府は「奄美群島の復帰に伴う暫定措置に関する基本方針」を閣議決定し、その後1954年5月25日「奄美群島特別措置法」が議員提案として国会に提案され、超党派的支持を得て、6月21日国会の承認を得、制定された。本法に基づく「復興五カ年計画」は住民の生活水準を戦前の本土並みに引き上げることが目標として復興事業がスタートした。「奄美群島特別措置法」はその後1964年に「奄美群島振興特別措置法」、1974年には「奄美群島振興開発特別措置法」と改正され、本土との経済格差是正、経済的自律を目指した計画は現在まで続いている。本法に基づく港湾や道路整備などのハード面での基盤整備とともに、ソフト面では生活習慣の改善運動である新生活運動が島民の側から自主的に提案され、熱心に実践されていった。

その一つに、標準語習得の必要性を強調する動きがあった。標準語の徹底も、本土との往来が再開し、本土との繋がりの関係性の中で重要性が増していったのである。明治以降、方言の使用を抑制し標準語を奨励する動きは、学校教育の中で継続してきた。だが、普段の生活で何の支障もなかったため、学校教育では教師の前でのみ標準語を使い、その他の生活ではこれまで通りの方言で意思疎通をしていた。そのため、標準語は島の人々の生活の中ではなかなか浸透しなかった。しかし、復帰後は密航ではなく堂々と本土へ行けるようになり、島の人々が本土での生活を経験することが増えた。本土で標準語を使えないことからくる劣等感や不都合を痛感したことが、標準語推進運動を再び本格化させる大きな引き金となっていた。また本土と往来が自由にできるという喜びから勢いづき、標準語の教育はかつてないほど激化した。当時は、高度経済成長の始まりにあたり、本土でも労働者を受け入れる産業が発達していった。沖永良部島では就職先も限られており、中学を卒業し、集団就職で島を出る子供も多かった。復帰後、1954（昭和29）年頃から神戸市の川崎製鉄の工場では、沖永良部出身者の入社も急激に増え、出身者だけの社内の親睦会「黒潮会」もつくられ約300名の会員がいたという。このような社会背景

で沖永良部でも本土に就職した子供たちが言葉で不自由しないようにと、復帰後は学校だけでなく、日常的にも島民こぞって「標準語を使いましょう」という運動は、ごく日常的にしかも自然に出てきた目標でもあった²。

復帰後の1954年頃、知名町でいち早く標準語使用が叫ばれた。当時知名小学校の教員であった大蔵忠志（男性、77歳：大正14年生）は、標準語教育の推進者であった。大蔵によると「日本復帰の感激を何か形に残したい。晴れて日本人になったのだから日本各地どこにいても通用する日本語をみんなが自由に使いこなせるようにしよう」と標準語教育に取り組んだという。中学校や高校を卒業すれば本土に働きに出ていかなければならない子供たちにとって大きな財産になるという確信もあった。当時28歳であった大蔵は、方言札を首からぶらさげるといような罰則法ではなく、標準語を使える度合いに応じて10級から1級までの文字を書いた札を生徒一人一人の胸ポケットにクリップで留めたという。大蔵さんは知名校区の婦人会や青年団などの会合へ行って学校での活動の内容を話し生徒の標準語の上達を説明した。多くの集落で「皆さん、親や先輩である私たちが模範を示さなければいけないのではないのでしょうか」と説くと、身を持って標準語の必要性を感じていた各集落の大人たちも「子や孫の幸せのためなら」と応じ、標準語使用の理解を得ていったという³。大蔵の取り組みは島内の教職員を集めた研究公開の場で発表され、大島郡内を管轄する名瀬教育事務局から来た指導主事に支持されたこともあり島内の標準語教育のさきがけとなった。方言尊重論もあったが本土に出て行く子供たちの将来のことを優先させ、家庭でも親は子供に対してなるべく標準語を使うようになっていった。また知名町では町全体で「普段の生活でも標準語を話そう」という目標が掲げられた。

和泊町でも標準語の教育は盛んになっていった。1962（昭和37）年頃から盛んであった親子会でもしばしば方言の禁止が努力点に取り上げられている。大島教育事務局が募集した教育論文「親子会運営の実践的研究」では、当時内城小学校教員であった伊勢達一（男性、79歳・大正12年生）による内城集落親子会の様子が述べられているが、「今までとり上げた努力点の分類」の項をみると、「生活一般に関すること」が30回、「学校できめたことの再確認」が25回、礼儀に関することが18回、「方言禁止」15回と記されており、一つの項目にできるほど方言をやめようという運動はしばしば掲げられた具体的目標であったことがわかる⁴。中村スエ（昭和7年生）によると、畦布集落親子会の発表では標準語での劇もあり、なかなか上手く話せないため標準語の台詞を話すだけで笑いがおき、上手く表現できない時には、「標準語でいえば」と標準語で前置きをして方言で説明するという光景がしば

しばみられたという(2003年3月19日のインタビュー・データより)。

昭和40年代には和泊町全体でこのような動きがみられ、町長もそれを推奨し役場内でも標準語を使用するよう推進された。永吉敏人(男性、54歳・昭和24年生)は、和泊中学校2年であった昭和41年に、方言を使ったため罰として担任の先生に「方言をえません」と1000回書いて持ってくるように指示されたという。何時間もかかり、これでは「叩かれたほうがましだと思った」ことを覚えていると語る。その他、方言を使ったことに対する罰には、平手打ちや教師用の大きなそろばんの上に座らせるなどがあったという(2003年3月19日のインタビュー・データより)。

昭和50年代になると標準語にもなれ、家庭内では子供に対して標準語を話す家庭が増え、またテレビが普及したこともあり標準語が日常生活にも浸透していった。それでも小中学校では「方言を使わない」ということが週間の努力目標になっていた⁵。

それはちょうど筆者が小、中学生のころであるが、昭和50年代に標準語教育はピークをむかえ、沖永良部島固有の言葉である沖永良部島方言を上手に、あるいは全く話せない子供が激増した。当時の子供にとって、標準語しか話せないことが「都会的でかっこよく」、方言しか話せない子供は「かっこわるい田舎者」として馬鹿にされる要素の一つであったことを記憶している。

標準語教育を推進していたのは他の奄美の島々も同様で、同じく標準語と「格闘」していた。それを象徴するように、「方言をからかわれた」ことが原因で死亡事件に発展したという悲しい事件がおこった(小野寺1989:33)。それは、1978(昭和53)年5月、奄美出身者が多数暮らしていた神戸市のことであった。徳之島出身の38歳の男性が大衆酒場で酒を飲んでいる途中に用事を思い出し、店の従業員に「電話をからしてくれ(電話をかしてくれ)」と頼んだところ、「日本語をしゃべらんかい」とからかわれたことが原因となり、けんかとなった。仲裁に入った客の一人をナイフで刺して死亡させたという事件である。「電話をからしてくれ」というのは徳之島の方言で「電話を借らち給れ」を標準語に直訳した言葉であった。一度方言で考えた言葉を標準語に置き換えてから話すので、言い回しや語彙がおかしなものになることもあった。それを島では、「いも普通語」と言っていたが、彼が一生懸命考えてしゃべった言葉が「いも普通語」で、本土の言葉とはかなり違っており、それをからかわれたことに、全身がかつとなるほどの羞恥心を感じたのであろうか。

関西には40万人の奄美出身者が住んでいるといわれるが、本土に暮らす奄美の人の中には、自分の出身地を語

りがらない人もいる。標準語を話しているつもりが、奄美人であることを自ら暴露してしまったことにやるせなさも感じたのであろう。事件を起こした人物が、特別短気な人だったかもしれないが、彼の怒りや羞恥心は、島を出て都会に住む奄美の人々だれもが多少は体験したことではないだろうか。方言を使う者は嘲笑され罰せられるという幼児期から繰り返し叩き込まれた記憶と「奄美の文化は低く野蛮である」という劣等感が方言をからかわれた時に自制心を狂わせてしまったのだろうか。だからこそ、この時代、奄美の島々では子供が本土に出て困らないようにと標準語教育を徹底していったのである。

4. 復帰半世紀と方言保存へ

戦後、「本土並み」を目標に本土への応化が進み、沖永良部島は、奄美諸島の中でも唯一お盆などの伝統行事を新暦で行う「先取の地域」となった。標準語推進運動は新生活運動とともに熱を帯びていったが、復帰実現から30年余りが経過して1985(昭和60)年頃になると、反対に方言を話せる子供が少なくなり、教育者たちは島の方言が消滅してしまう可能性に気付き始めた。方言を話せない子供たちが親になる時代を想像し始めた。今は方言を自在に話せる高齢者がいるが、次第に少なくなることは明らかで、子供に方言を伝承できる者がいなくなれば、方言の消滅は必然であると容易に推測できるからである。島の教育者たちは、島固有の文化である方言消滅に強い危機感をもったため、学校や社会での方言使用禁止の方針はなくなり、逆に方言の大切さが説かれ始めた。1987(昭和62)年には、和泊町立城ヶ丘中学校の生徒が「方言の大切さ」という題で大島地区中学弁論大会最優秀賞になっている。

日本復帰後、郷土に誇りを持つようにと学校教育に取り入れられた郷土教育に、方言が取り入れられたのは、方言消滅の恐れを感じ始めた1980年代後半になってからであった。和泊町教育委員会では1990(平成2)年、島の格言をもとにした「方言カルタ」を作成した。このカルタは現在でも和泊町の4つの小学校(和泊小学校、大城小学校、内城小学校、国頭小学校)で「郷土で育てる肝心(チムグクル)の教室」の事業の一環として活用されている。総合的な学習の時間に地元の方言話者を講師として招き、「方言カルタ」を使った方言学習を行うのである。

方言保存の気運も高まり、和泊町では文化協会や教育委員会の主催で郷土教育の一環として、1994(平成6)年から「島ムニ大会」という方言で演劇やスピーチを行う会を開催しはじめ、方言保存に力を入れ始めた。第一回目は1994年8月12日、和泊町文化協会発行の機関紙「文化のしおり」7月号には開催に向けて

故郷の言語文化、祖先代々受け継がれてきた方言が失われていくことは、とても寂しい事です。戦後各学校では標準語を奨励し方言を禁止した時期があり、その後も共通語を使用している家庭が多く、方言を使えない大人や子供が増加しています。中には聞いても理解できない子供たちもいます。方言のもつ美しい響きや方言のそこを流れる故郷の心を子供達に教え、伝承していくねらいで、「島ムニ大会」を計画しました。…大会当日は町民体育館への入場から終了後町民体育館を出るまで、開会の挨拶から出演者も聴衆も全員で町民体育館内を方言で埋め尽くし、感動の一日にしたいと考えております…。(「文化のしおり NO. 35」平成6年7月号)

と書かれており、方言の復活および普及、そして保存への意気込みが感じられる。その後知名町でも「島ムニ大会」が行われるようになり、また小中学校でも学芸会など学校行事で方言の劇が開催されるようになった。東京でも1985年2月「奄美方言研究会」が発足した。東京には奄美出身者が10万人住んで いると言われお年寄りが子供に呼ばれて同居している場合が多い。お年寄りが集まって正確な方言を一か所で聞き、記録することができれば、と発足したのであった。

そして、奄美の島々では「方言の日」が制定され始めていく。早い段階で方言保存活動に力を入れた与論町は2006(平成18)年2月18日に方言の日が決められた。2月18日に制定した理由は、与論の方言で「言葉」を「フトゥバ」といい、^フ、^ト、^ッ、^バに掛けたからである。沖縄県では沖縄本島の方言で「言葉」を意味する「クトゥバ」を掛けて、2006(平成18)年9月18日に方言の日が決められた。その後、2007(平成19)年、奄美諸島の各市町村を管轄する大島地区文化協会連絡協議会によって、2月18日に方言の日が定められ、方言の保存、伝承の啓蒙活動を行っている。

奄美諸島に限らず、南西諸島は全域で、島言葉の保存に力が入っている。沖縄県では、地元紙によれば、方言を使える沖縄県民は35%であるという。そして、2013年8月30日には「島言葉」の復興と継承に取り組む「島くとうば連絡協議会」(照屋義実会長)が設立され、県議会と沖縄県教育庁に、保護・強化に関する条例を制定するよう陳情したという。具体的には学校で「島くとうば」の授業を設けるべきであるとする内容である。また、翁長雄志那覇市長は、「ウチナーンチュ(沖縄人)のアイデンティティ」と「しまくとうば」普及運動の先頭に立っている。

2009(平成21)年2月、国際機関からも方言消滅の恐

れが指摘され、奄美沖縄の方言保存の機運を高めた。ユネスコ(国連教育科学文化機関)は“Atlas of the World's Languages in Danger”を発表し、日本国内では、8言語・方言がその中に含まれていた⁶。奄美沖縄では、全ての地域の言葉が消滅の危機の度合に応じ、八重山語、与那国語が「重大な危機」、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語は「危険」と認定されていた。

ユネスコの指摘を受け、文化庁はこれらの言語の調査を研究者に委託した。島々には言語学者、方言学者が調査に訪れ、島の人々にも方言の危機的状況が伝わった。このような外部からの客観的指摘を受け、関心の薄かった島民の中にも方言保存に興味を持ち始める人が増えてきた。例えば、50代後半の松村雪枝は、沖永良部島にUターンした女性であるが、東京から島言葉を調査するため来島した大学教員と交流していくうちに方言の希少価値を再確認した。そして、島言葉を次世代に残すために島に伝わる民話を方言で音源を記録し残そうとしている。

その後2015年、文化庁主催の文化の祭典である「国民文化祭⁷」が鹿児島県で開催された。第三十回目となる県をあげての文化事業の開催を受け、奄美各地でも郷土の文化を見直す機会があった。その際、真っ先に浮かんだ郷土文化が島の言葉だったのである。そのため、2015年は、奄美の島々で、方言に関する催しが各地で開催されていたのであった。

さらに2016年11月13日には、文化庁、鹿児島県、与論町、同町教育委員会、大学共同利用法人人間文化機構国立国語研究所、国立大学法人琉球大学が主催の「危機的状況にある言語・方言サミット奄美大会 in 与論」が与論島で開催された。消滅が危惧される方言の状況改善を目的としてである。

以上のような経緯で、現在奄美沖縄の各地では、かつてないほど方言復興の動きが盛んになっていたのである。

IV おわりに

琉球語は、琉球という独立国の言語から、一近代国家の「方言」と位置付けられ、衰退し、現在、消滅の危機にある。近代化、グローバル化の波の中で、小社会は大きな社会に飲み込まれ、言語、文化、アイデンティティを失っていく過程とも重なっている。それは、奄美沖縄に限ったことではなく、世界的にも小規模民族社会の言語は消滅の方向にあり、ユネスコの発表では2009年の時点で2500の言語が消滅の危機にあるという。沖永良部島では、1980年代後半より、方言の保存・継承に力を入れるようになった。それでも、近代国家の少数派言語である現実から、かつて、琉球語があたりまえのように生活の中で話されていた時代を取り戻すのは難しいであろう。

だが、かつて自らの標準語推進運動により失いつつあった琉球語は、今では消滅の危機意識や自主的な保存活動により完全に消滅することもないであろう。なにより言葉はアイデンティティの重要な部分として、文化を伝承する要として再認識されるようになったからである。

《注》

- 1) 木部暢子「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書2言語・方言の定義について」2011
- 2) 主に筆者の聞き取り調査に基づく。島に住む人の多くが、標準語推進運動の体験者であるため、多くの情報が得られた。標準語運動は、共通しているのが、本土に出て苦労をしないためである。
- 3) 当時の標準語推進の様子は、小野寺ヒロミ「滅びゆく“ことば”を訪ねて—奄美の方言、奄美の心—」『たたかひのルポルタージュ』No. 10 (1989)、現代ルポルタージュ研究会編、36ページに詳述されている。筆者も2003年3月14日に大蔵氏と2時間ほど面談し内容を確認した。
- 4) 『和泊町誌—歴史編—』和泊町編1985の1102ページにも収録されている。
- 5) 聞き取り調査に基づく。筆者の体験も含む。現在は、方言が推進されていることを考えると、筆者が小、中学生時代であった昭和50年代が標準語教育のピークであったといえる。
- 6) 奄美沖繩以外で危機的な状況であると認定されたのはアイヌ語「極めて深刻」と八丈語「危険」である。
- 7) 文化庁主催の文化の祭典で、1977年に始まった。毎年、各県持ち回りで開催され、文化の国体と言われている。

参考文献、引用文献

- 井谷泰彦 2006『沖繩の方言札』ポーターインク
- 上村幸雄 2002a「日本における危機言語と関連する諸問題」『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』明石書店、pp. 318-337
- 上村幸雄 2002b「第十五章・第十六章へのレスポンス」『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』明石書店、pp. 352-359
- 大山勝男 1999『あるシマンチュウの肖像』みずのわ出版
- 小野寺ヒロミ 1989「滅びゆく“ことば”を訪ねて—奄美の方言、奄美の心—」『たたかひのルポルタージュ』No. 10、現代ルポルタージュ研究会編、pp. 33-40
- 木部暢子 2011「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書 2言語・方言の定義について」『文化庁委託事業報告書』、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、pp. 5-8
- 木部暢子 2014「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書 鹿児島県沖永良部方言」『文化庁委託事業報告書』、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、pp. 15-27

- 神戸沖州会編 1989『神戸沖州会65周年記念誌(寄稿編)』神戸沖州会
- 高橋孝代 2006『境界性の人類学』弘文堂
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 2015『文化庁委託事業報告書—危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖繩方言・八重山方言)』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所
- 西久保紀林 1879「沖永良部島諸事改正令達摘要録」
- 真栄平房昭 1994「人類館事件」『国際交流』63、国際交流基金、pp. 21-25
- 琉球大学国際沖繩研究所 2013『文化庁委託事業報告書—危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等に関する調査研究(奄美方言・宮古方言・与那国方言)』琉球大学国際沖繩研究所
- 和泊小学校記念誌編集委員会編 1977『創立百周年記念誌』和泊町立和泊小学校
- 和泊町文化協会 1996「文化のしおり」NO. 35 和泊町文化協会
- 和泊町編 1985『和泊町誌—歴史編』和泊町教育委員会
- 和泊町立城ヶ丘中学校 1987『創立50周年記念誌』和泊町立城ヶ丘中学校